

福島南相馬は原発事故で深刻だ

福島南相馬にボランティアにいらてきて

2012年9月28日～30日のレポート

2012年10月14日 郵政産業労働者ユニオン練馬支部 吉沢利夫

福島県の南相馬にボランティアにいらてきました。練馬支店からは3名が参加し、大泉支店2名、芝支店、新宿北支店で働いている人で計7名です。南相馬にいくのには途中の道路が原発事故の影響から通行禁止のために大きく迂回しなければなりませんでした。その禁止地域はわずか30分で目的地につくのに3時間も余計にかかったために東京の練馬駅9時30分出発から現地のボランティアセンターについたのは18時過ぎで約9時間もかかってしまいました。通行禁止区間を事前に知っていれば、あるいは道路公団が再三にわたって周知をしていればこういうことはなかったのですが、それにしても南相馬は遠いというのが実感です。

ボランティア一日目の作業は泥出しとガレキ撤去と思っていましたが、放射能によって家を片付けることができなくなっていることから被災者からの要望がこの日はありませんでした。そのために仮設住宅に住む被災者に救援物資のお米等を届けながら行政への要望を訊ねる行動でした。福島県だけで16万人が避難生活をしており、その中の一部の人とはいえ直接の声を聞くことができました。仮設住宅の間取りは4、5畳の部屋が二部屋でそこに夫婦2人のところ、5人で住んでいる家族等ありました。お米等を届けていくと大変喜ばれ被災したときの話から今の生活のことが出されました。「仮設住宅での住みにくさ」「水道の水が放射能で飲めないのでペット



ボトルの水を買って飲んでいる」「ここにいつまで住んでいられるか不安」「仕事は失業手当が切れてしまった。まだ働く先が見つかってない」「漁師をやっていたが船にかけた2000万円の全財産が津波でもっていかれた」「ここに変る代替の土地を早く市は用意してほしい」等です。

様々な要望が出された中でも地震、津波に福島は原発事故が加わって三重苦になっていることが切実に訴えられました。80歳代のおばあさんは「地震、津波でも家族全員は助かったけれども原発事故によって家族は三つの場所に分かれて生活している。バラバラで生活しなければならなくされていることが本当に悔しいです。この生活が一体何年続くのか、将来が見えません」と目に涙を浮かべながら話していました。こういう話を聞いている最中でも原発事故は収束せずに放射能は放出しつづけ、この地域の1時間あたりの空気中の放射線量は0、34マイクロシーベルトです。東京は0、058マイクロシーベルトですから約7倍、いかに高い数字であるかが分かります（ちなみに全町民が避難している双葉町は9、766マイクロシーベルトです）。



仮設住宅に住む被災者に救援物資を届けながら国や市への要望を聞く行動が一段落した後、ボランティアセンターの宮前さんが小高地区（原発から20km圏内）を車で案内してくれました。ここは警戒区域が解除されるまでの1年4ヵ月間人が入れなかったところで、地震で倒れた家や潰れている家がある中でも大きな家屋やビル、商店街、JR常磐線の小高駅があります。しかし、放射能によって人っ子一人いないゴーストタウンで映画やテレビドラマでもみるような光景です。JR小高駅の線路は草が生えて線路自体が見えませんが、よく見ないと線路とは分からなくなっていました。大正3年の創立で98年の歴史をもつ小高小学校の校庭は草がぼうぼうと生えて人間の背丈に達していました。子どもたちが学校に通えなくなり、自然のままにしておくところのようになってしまうのです。小高郵便局も営業なしの状態が1年半以上続いているために郵便局の看板だけは目立っていましたが、建物自体は古ぼけたものになっていました。



街から離れて海岸に近いところに車を走らせると津波で家がなくなったところが多数あった中にも100坪以上と思われる家がところどころにポツンとあります。その家に住もうと思っても放射能によって生活できないために空き家です。更に車を走らせると干拓地域です。ここは津波によって200ヘクタールの畑が湖の状態でしたが、先月になってようやく排水ポンプの稼働によって陸地が見えるようになった、とボランティアセンターの宮前さんは説明していました。この話からも福島は他の被災地に比べて復興が遅れていることが分かります。

私たちが車を走らせていきますとよくぶつかるのが進入禁止のバリケートです。そこには大きなマスクをした数人の警察官が車を誘導していました。ここから先は浪江町で進入禁止なのです。それを見た時には日本の国には国境がないのに国境をみる思いでした。

次にボランティアセンターの宮前さんは東北電力が新たに原発を建設する予定地（浪江・小高原発）を案内してくれました。そこは浪江町と小高地区のちょうど境目で、10メートル以上のポールのような鉄塔が建っていました。

建設用地は買収されていますが、ここで暮らす住民が反対しているために建設されずに何年も経っています。しかし、東北電力は建設をあきらめたわけではなく住民の反対運動は続いています。ここに住んでいた人の一部は東北電力に土地を売り、海岸に近いところに移り住んで電力御殿の家を建てました。しかし、去年の地震と津波によって電力御殿は全部流されてしまいました。今は仮設住宅にいる人、他の県に移っていった人もいます。

浪江町は全町民が避難生活（昼間の時間帯に帰れるが、寝泊りできない）をしています。避難をせずに一家族2人の老夫婦（吉澤さん）だけがここに留まって希望牧場を営んで生活しているといいます。それはテレビや新聞にも報じられたそうです。息子さん夫婦は他に移って生活していますが、その老夫婦は国からここに住み続ける許可をえて生活し、原発事故の状況と自分が体験していることをインターネットで毎日更新し、発信し続けている。原発の建設に一貫して反対し続けて町会議員選挙に何回も挑戦し続けているといいます。避難生活をせずにここに留まって自分の体験や地域の変化、原発事故が何をもたらすかを発信し続けているエネルギーに全員が凄い人があるものだと感心しました。



ボランティア二日目の行動も昨日と同様に仮設住宅の被災者に救援物資を届けながら政府や市への要望を聞く行動でした。

老人、若い夫婦、子どものいる家庭から話を聞くことができました。何箇所も避難所生活を変えてきていて、ここによく落ち着いたという人がいました。そして、誰もが言うのは「原発事故で明日の生活が見えません」というものでした。原発事故さえなければこのようなことはなかったことを考えると、福島の復興は原発事故を収束させること抜きにはすすみません。それを聞いたときに改めて原発再稼働は許してはならないし、原発ゼロの社会、原発に変わる自然エネルギーへ転換させていくことが必要であることを強くしました。

私たちが被災者と話をすすめていると復興の遅れが話題になります。そのときに被災者に「除染や代替用地の買い替え等の復興が遅れている原因の一つに政府は東北震災の復興ということで19兆円の予算を決めていますけれども、これは東北の復興のためだけでなく「全国防災」という名目で他の公共事業にも使われることを知っていますか」と話しますと、被災者の多くは知らなかったようで「何のための復興予算なのかが分からない。政府は何をやっているのだ。ひどいものだ」と怒りの声をあげる人、嘆きの声をあげる人もいました。

こうした声があがるのは当然です。これにふまえて私たちは引き続き被災者への支援と共に、原発事故の収束と全面補償を、原発再稼働反対、原発ゼロの社会を、政府は復興予算を他に流用せずに本格的な復興支援をという声をあげていくことです。

今回のボランティアは、参加者に「またいかなければ」という気持ちにさせた3日間になりました。10月9日に行った反省会では「行ってよかった。人が困ったときに支援することの大切さを感じた」「大変な生活を強いられているのにがんばっていることに勇気づけられた」という意見と共に、「一年半以上過ぎるとボランティアの参加者が少なくなっているということだから、また企画していくべきだ」「被災者の中には福島を忘れ去られることを心配している人もいる。職場の人に伝えていくことも必要だと思う。さっそく郵政産業ユニオンの組合掲示板に写真を貼っていきたい」という意見もあがりました。

次回のボランティアは現地と相談しながら決めていこうと考えています。

